

火祭り「どんど焼き」(トンド焼き)の由来&推移 そして現状は？

火祭り“どんど焼き”とは、

日本各地で行なわれる小正月(1月15日)の火祭りです。地域によっては、北陸・東海地方は「左義長」、関西は「とんど焼き」、九州は「鬼火焚き」、静岡県では「さいと焼き」と呼ばれている。正月に使った門松・しめ縄・しめ飾り・おみくじ・お札・お守り、破魔矢、祈願成就した「だるま」などを持ち寄って焼き、その火で暖をとり、団子(へそ団子)や餅を焼いて食べて無病息災・五穀豊穡を願うものです。お正月にお迎えした神様をお送りする日本の伝統的な行事(1月の14日の夜または15日の朝)です

昔の吉井部落のトンド(どんど焼き)の推移と現状

地区あげての行事「どんど焼き」開催に至った理由は、昔から組まれていたグループ群が解体して14日の風物詩が見られなくなってしまった。そこで2008(平成20)年に地域活性化として立ち上げた地区起こし行事。

どうして各戸を分類して組まれたかは不明だが、2~10戸の小集団が10群以上地区内に在ったように思う。集団ごとに材料を揃え、当日(14日)の午後に周辺の田に各戸から2名前後が出席し共同作業でトンドを組み立てた。そして薄闇になった夕刻一斉に点火するため、辺り一面は煙が立ち上げたものだ。

組立→点火燃焼→様子状況→事後処理

青竹を骨格として、藁を詰めて円形の櫓(やぐら)を組み、これに火を投じてしめ縄や松飾りなどを焼く。豪快に燃え上がった火の中に書初めを青竹の先につけ投げ、高く舞い上がると上達するなどといわれる。火力がすこし弱まった頃を見はからって青竹の先に団子や餅を刺して焼き、お互いに交換して食べる。各戸からは参加可能な家族員が出席した。

(買うてんか、買うてんか・・・の合言葉でお互いに食べ比べる風習)。

1本の青竹に挿すへそ団子の数は12個(但し、閏年は13個)とされている。

青竹に挿した団子の1個は残して家に持ち帰り神棚に、そして最初の雷鳴時に家族分け合って食べれば、その年は雷事故から免れるとも伝えられてきた。どんど焼きの燃えさし(種火)は魔除けになるといわれ、家路に持ちかえり門口に立てたり、火を持ち帰り灯明に点火などする。